

前号作品短評A 〈小野澤〉

●同じ年に生を受けたる縁にてかたみに歌を詠みて読みあふ 結城 文

同じ号、河村さんの短信に、昭和九年生まれの歌人の会の集まりで、昨年晩秋の頃、奥津軽に出かけたことが出ている。これに、作者も参加しているようだ。一連タイトルも「津軽野をゆく」。もう一首と合わせて、会の紹介が成されている。

古希の年の発足をして十年余そのうち三人はすでに世になし

晩秋ということもあるが、挨拶に終わっていない、深々としたものがある。土地柄に触れているところ、二首を挙げる。まずはみることをしている。

津軽野はまことに広し刈田の上ただべうべうと風のゆくなり

赤き葉はあくまで赤く黄なる葉はあくまで黄なり津軽の里山

●木枯しの吹く音やめば静けさに仕舞仕度の思いめぐらす 市川茂子

年末から年始にかけての歌で、タイトルは「寒気」。これは年末の歌。風がやんで、しずかになったところで、こんどは、思いをめぐらすことになる。それも仕舞（終い）支度の思いなのだ。その前には、何か言葉が、方言が出てこないなど、さらには、年を重ねているのに標準語にも訛りが混じっているようだ、と。何か振り返るばかりの思いがある。そんな日々でも、年始で気分が変

わるようなところがある。

酉年の幸先の良き思いなり晴天続き大寒に入る

●弥十郎より水の不足を聞きたれば鬼は一夜に逆堰作りき 河村郁子

流れ変へ田を潤して崇められ地名は鬼神堰と鬼沢

タイトル「津軽伝説（一）鬼神伝説」の、その核心のところか。農夫の弥十郎に睦んでいた山の大人おほひとと鬼ということが、その前段にある。鬼神社は岩木山の麓、阿曾部アソノベの森にあるという。くだんの旅で、津軽の伝説に興味を持ったらしい。日本人本来の心の幹細胞が残っている、とこれも同じ短信に作者は書いている。こんな歌が、結論の部分か。

今もなほこの地のならばし節分に豆を蒔かぬと守られてゐる

●十代に思はざりしを石の上いそのかみにふるさとの山われにやさしも 布宮慈子

石上は、ふる、にかかる枕詞。歌は離郷者の思いのようだが、作者は、また帰郷者でもある。一連タイトルは「雪」。冬にとりわけ故郷を感じる土地柄なのだ。次の歌で葉山は月山の東に位置する山らしい。その次の歌の雪の種類が多さ、とくに忘れ雪（終雪しゅうせつ、に同じ）、には何かあとをひくものがある。

薄雪の疎林を右にカーブしてゆけば見えくる月山、葉山

俄雪にはか、粉雪、根雪、牡丹雪ぼたん、綿雪、粗目雪ざらめ、忘れ雪

●三ツ辻に傾いてある石仏凭れてひとつ牛乳瓶がある

小野澤繁雄

三ツ辻は三叉路のことだろう。田んぼ道がそのまま現在の道路になったような交差点。そこにある石仏は傾いていて、花を挿すための牛乳瓶がもたれるように置いてある。懐かしい風景にホッとしながらも、三ツ辻・傾く・凭れるの語句からは時代を遡り、また異界へ通じるようなほの暗さを感じてしまう。次の歌は車から見ている場面か、よく子どもを観察している作者である。

信号が青になりそう三人の中学生が突っ込んでくる

●「冬景色」口ついて出る小六月

谷垣満壽子

「小六月」とは陰暦十月のこと、小春。ほぼ十一月にあたるという。冬になってからよりも、冬になりかけのころの寒さがこたえるようだ。冬景色だなあ、と思わず言ってしまった自分に驚く。実感がこもっている。東京には富士のつく地名が多い。いまよりもよく見えたのだろう。

むかし富士みえし小径や冬晴るる

●好きなのは金柑・名誉なきディラン

新野祐子

昨年十月、歌手として初めてノーベル文学賞に決まったボブ・ディラン。発表後しばらく沈黙し

ていたから、賞を受けるのかどうか話題になった。「反骨のミュージシャン」「時代の代弁者」等のイメージがある彼は、十二月の授賞式には「先約があるため」欠席したものの、今年四月メダルと証書を受け取っている。秋の季語であるキンカンとディラン、なかなか面白い組み合わせではないか。いわれてみれば、という次の一句。「平等」の意味を改めて考えさせられる。

平等に解けてゆくなり雪達磨

●床に落ちしゼムクリップ雫のごとしよと短歌に詠みたる女思ひ出づ

丸山弘子

調べてみると「ゼムクリップのゼムって、何？」というのが出てきた。たしかに知らない。イギリスで一八九〇年ごろにゼム・マニユファクチュアリング・カンパニーが発明したというのが通説で、そのゼム社のゼムが「ゼムクリップ」となったらしい。掲出歌は、うたった女性を思い出すというのだが、たとえに意外性があってその歌を読んでもたくなる。次は躍動感のある一首。

われに気づき犬は一瞬止りしが主人を追ひて朝を駆けゆく